



本物になるために

本校の今年度のキーワードをあげるとすれば、「本物にふれる」になるかと思います。シンガポール修学旅行では、現地に赴いてこそ感じるものや分かることがありました。月初めの車いすラグビー教室2ではパリパラリンピック大会の様子を日本代表の中町選手に、昨年から引き続き教えていただいたほか、金メダルも間近に見たり触ったりしました。そして仕上げは先週の SHIBUYA CUP 2024学校観戦です。リアルな試合を自分の目で耳で感じ取り、応援したことで五感から学ぶ時間になったと自負しています。

また、今後、予定されている1年生のふれあい体験は疑似体験を通して、身体障がい者への理解や共生社会の一員としての自覚を学びます。他には来月に予定されている3年生の音楽鑑賞教室も、オーケストラの奏でる生の音楽にふれます。

これらはすべて、本物にふれる経験(行事、授業等)だからこそその学習効果です。本物がもつ、百聞は一見に如かずだったり、そのできごとの当事者の言葉だからこそその重みだったりするのだと思います。

さて、本物という言葉を使うとき、私はこの言葉を思い出します。

「どんなに馬鹿げていることでも、貫き通せば本物になる」です。

これは、漫画の主人公の男子高校生が同性愛の悩みをもって生きていたときに、ある素敵なおばあさまに背中を押されるように言われた言葉です(恐らくこんなフレーズで、法に触れない範囲をさします)。

また、途中で投げ出さず、一つの分野を貫いて専門性を上げたり、卓越した技能・スキルに到達することでもあると思います。いわゆる『オタク文化』も認められていますし、クスツと笑ってしまうようなギネス記録の保持者、下積みを経た漫才のチャンピオンなども、諦めずに努力を重ねたからこそ本物になれたのだと思うのです。みなさんは、どう思いますか？

もちろん、貫くには本人の強い信念や周囲の理解と協力、時には逃げ道も必要かもしれません。誰もが認める第一人者にならなくても、貫くことで、そこまでの道のりで見えてきたものや様々な人々との出会いが得られます。

生徒の皆さんには、自分を諦めずに「まずは行動してみる」をつぶやいてみて欲しいのです。

ただし、やるべき学習や家族との約束などを軽視してはいけません。厳しいようですが、義務と権利の関係性も理解していく時期です。社会科でも習っていますね。

あの人は本物だと思ってもらえるよう、日々、過ごしていきたいものです。

本物つながりの最後は、この時期の風物詩?の3年生の面接練習です。

面接官にこの子をぜひ、入学させたい、本物だと感じていただけるよう、個々の良さや可能性を見極め、生徒と向き合っています。内心点は決まっていますが、面接や集団討論でしかわからない自己表現や物事のとらえ方、やりとりする中で生徒の誠意や思いを感じてもらえるよう、愛ある指導をしています。顔を真っ赤にして頷く生徒、逆に青ざめる生徒、緊張がほぐれて涙がほほを伝ってしまう生徒、思うように回答できない自分に歯がゆさを感じてリベンジを誓う生徒・・・様々です。そんな3年生一人ひとりが、納得する面接を終えられるように願ってやみません。がんばれ。

